

富山県神社庁長賞

黒部市立若栗小学校 六年 中西 瑠煌斗

『鼻歌は平穩の証』

「チリロローチリロチロ」ランドセルを背負って学校に行く時、タオルを持って風呂に入る時、いつの間にか口ずさんでいた。

六年の秋、ぼくが住むとなりの中村地区から小天狗の募集案内が届いた。コロナで中止されていた獅子舞だ。最後に見たのは二年生の秋。ぼくは神社で刀のおどりを見えずとやってみたいと思っていた。すぐに参加をきめた。ワクワクの始まりだ。

練習は夜七時半からだだったが、外が暗くなると早く行きたくてそわそわした。まっ暗な公民館にだれよりも早く行ってじっとかくれて次に来た人を驚かすためだ。そっとドアを開けると、やられた。今日もビックリして声を上げてしまったのはぼくだった。二人でじっとかくれている時間もたのしかった。

練習は扇から始まった。思っていたより難しい。そうだ、ぼくはおどりが苦手だった。次の傘のおどりに進むには、中村の人の合格が必要だ。家にあったお母さんの扇子を使って練習した。なんとか合格。お母さんが昔使っていた傘を出してくれたので一緒に練習した。楽しかったが、お母さんは張り切りすぎてすぐに傘を壊してしまった。大笑いしながらおどった。

いよいよ刀のおどりだと思っていたその日、ぼくは学校で発熱した。お祭りには出られないかもしれないと思うと涙が出そうになった。祭りの日が迫っていた。流行りの感染症ではなかった。治りますようにと祈るような気持ちで眠った。ぼくの気持ちが届いたのかすぐに熱はさがった。刀のおどりは想像の何倍も楽しかった。

祭り当日、ぼくたちは学校を早退して公民館に集まった。若栗城跡の館山には、赤い彼岸花が沢山咲き青空が広がっていた。太鼓や笛の音に合わせておどった。館山、老人ホーム、新幹線駅など沢山の所でおどった。夜になると通り沿いの家の前でおどり続けた。神社に近づくと旗持ちの六年生も合流した。ぼくはますます張り切っておどった。

みこしが神社に入る時花火が上がった。大迫力だ。願念、天狗、獅子、花笠やぼくたち小天狗がおどった。ぼくは扇のおどりを担当した。まだまだおどりがたかった。

「チーチーチロロ・・・」天気が良い日、楽しいことがあった時、そうでない時もぼくはいつの間にか祭りの笛の音を口ずさむ。足も軽くなる。心がはずむ。

二〇二四年元旦。大きな地震がぼくたちをおそった。地面や電信柱が大きく揺れた。

「逃げてください」とテレビから緊迫した声が繰り返されアラームやサイレンがひびいた。

余震は今も続いている。今まであたり前だと思っていたことがありがたいと知った。鼻歌を口ずさむ平穩な日々になりますように。